

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370524

研究課題名(和文) 日本語史叙述の方法に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental research on methods of narration for the history of the Japanese language

研究代表者

大木 一夫 (OKI, Kazuo)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00250647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の歴史的な事実は相当程度明らかになっていると見てよい。しかしながら、日本語史の叙述はいかにあるべきかという議論はあまりなされてこなかった。そこで、本研究は歴史哲学の「物語り論」という視点から、日本語史叙述の方法を検討した。そして、その方法をふまえ、日本語史上の大きな変化である係り結びの衰退という事象についての歴史叙述をおこなった。同時に、日本語史叙述が言語史叙述一般に寄与できる点、日本語史叙述のための重要概念の検討もおこなった。

研究成果の概要(英文)：Currently, we possess a good deal of knowledge on the history of the Japanese language; however, up until now, there has been little debate over how this history should be narrated. The purpose of this project was to establish a proper methodology for narrating the history of the Japanese language from the perspective of historical narratology. Using this methodology, I conducted a historical narrative on the loss of kakarimusubi (focus particle binding), a major development in the history of the Japanese language, and at the same time presented crucial insight into how historical narration of the Japanese language can contribute to historical narration of languages in general.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 従来の日本語史研究の問題点

日本語史研究は日本語学の中で一定の位置を占める分野であり、盛んに研究が進められてきた。その成果も積み上がってきており、日本語の歴史的な事実は相当程度明らかになっているといえる。ただ、それは多く「事実の羅列」という感が否めないという批判はあった。山口佳紀、小松英雄の批判や阪倉篤義らの議論などは、そのような議論である。

### (2) 問題の原因

このような状況は、これまで、日本語史叙述の方法の議論が不十分だったというところに起因すると思われる。日本語史も歴史であって、日本語の展開を歴史としていかに描くのかという歴史叙述の方法についての議論が基礎論として必要であるといえる。一般の歴史が政治・社会・文化等を対象としてその展開を描くのだとすれば、言語史は言語を対象とすることになるが、この対象となる言語は、歴史叙述において、一般の歴史の対象とするものと全く同じとは考えにくい。しかし、このような視点を持ち、日本語史の叙述とはどのようなものであるか、また、いかにあるべきかという議論はあまりなされてこなかった。

### (3) 近年の動向

ただ、近年は日本語史の叙述方法の本格的な検討への助走がはじまっているように思える。野村剛史の「物語にまとめる」、青木博史の「歴史的变化をダイナミックに捉える」、矢田勉の「ロープ状の言語史記述モデル」などの言及は、「事実の羅列」ではない日本語史叙述についての議論の一端だといえる。また、2013年度日本語学会秋季大会シンポジウムは「日本語史はいかに叙述されるべきか」という企画(大木一夫他企画)である。このような点を見ると、日本語史の叙述方法の検討の好機が訪れているといえる。

### (4) 基礎的検討の必要性

ただし、日本語史叙述の方法を練り上げていくためには、より基礎的な検討が必要であると思われる。そもそも歴史叙述とはいかなるものかといった歴史叙述の一般的なあり方の検討、そのような叙述方法は言語史叙述に有効なのか、言語史叙述に特殊性はないかという検討、さらには、言語史叙述において歴史叙述の一般性はどのような形で具現化されるのかといった検討も行っておく必要があるといえる。このような検討を欠いては、個別の方法が示されるに過ぎず、言語史叙述の方法一般が示されることにはならないからである。

## 2. 研究の目的

そこで、本研究においては、(1)言語史における歴史叙述の方法についての基礎的検討を行い、(2)その方法論にもとづき、日本語文法史における具体的事例をとりあげ、言語史叙述を試みる。さらに、(3)さらに日本語史叙述のあり方を考えるために必要な検討もを行い、上記の議論を補完する。

### (1) 歴史叙述の方法の基礎的検討

歴史叙述については、近年歴史哲学において、歴史学を含め広い分野に影響を与えている「物語り論」という視点を中心に、他分野の歴史叙述のあり方も参照しながら、言語史の叙述方法を検討する。

一般的な歴史叙述と比較したときに、言語史叙述はどのような点で相同であり、どのような点で異なるのかという視点から検討を進め、どのようなことを述べれば言語史の叙述になるのか、ということの基本的側面を明らかにする。

その際、言語史・言語変化で問題となるような諸点、言語変化の型・方向性、変化の因果関係、変化に対する言語史の意味づけといった点が言語史叙述においていかなる位置をもつのかにつき、検討を加えていく。

### (2) 日本語史における具体的実践

以上の基礎的検討をふまえ、日本語史の具体的事例につき、文法的事象に絞り、実際に叙述を試みる。とくに、係り結びの衰退という問題を対象とする。既に進めている係り結びの機能の検討をさらに深め、それをもとに、係り結びの衰退の要因を活用形の機能の変遷との関係で叙述する。そして、これを言語史叙述のあり方のなかに位置づける。

### (3) 日本語史叙述の方法の周辺諸問題の検討

日本語史叙述のあり方を考えるにあたって検討しておかなければならない点のいくつかにつき、検討を加える。とくに考えるべき点は、次のようなものである。

#### 日本語史の叙述方法の位置

日本語史研究は言語史研究の一端をなすものであるが、その特徴を描き出すことによって、言語史研究における日本語史叙述の位置をはっきりさせる。

#### 日本語史叙述に関わる基本概念の再検討。

日本語史叙述を進めるにあたり、再検討の必要な概念がある。それについて、考察を進めることで、日本語史叙述をいかにこなすかの指針を得る。

### 3. 研究の方法

#### (1) 歴史叙述の方法の基礎的検討

歴史哲学・歴史学等における歴史叙述理論についての把握

言語史叙述の方法の基礎的検討をおこなうにあたっては、歴史哲学・歴史学等における歴史叙述理論についての把握をもとに進める。歴史一般の叙述理論の検討が進んでいる歴史哲学における議論、主に他分野にも影響を与えている「歴史の物語り論」を中心に検討する。また、言語論的転回を経ているとされる歴史学が歴史叙述の方法をどのように把握し、また実践しているかを分析する。

他分野の歴史叙述理論をふまえた日本語史叙述の方法についての基礎的検討

上述の他分野の歴史叙述理論をふまえて日本語史叙述の方法についての基礎的検討をおこなう。

それにあたっては、(a)これまでの日本語史の叙述方法について言及している議論を広く探し、その主張点を明確にする。その上で、どのような点が具体的な叙述に活かしているのかを分析する。その上で、(b)上記の歴史叙述理論・一般的な歴史の叙述方法をふまえ、それらと言語史・日本語史の叙述との異同を分析する。また、上記分野の叙述理論・方法をふまえ、どのようなことを述べれば言語史の叙述になるのか、ということの基本的側面を明らかにする。

#### (2) 日本語史における具体的実践

上記のような日本語史叙述の方法をふまえた文法史叙述の実践のために、文法史上の現象についてのデータ収集を行う。係り結び形式、それにかかわる連体形・準体句の用例を収集する。電子テキストも利用する。

本研究では日本語文法史を中心に検討を進めるが、日本語史他分野における叙述方法との比較することも視野に入れる。日本語史の叙述方法といっても、分野によって方法が必ずしも全同ではないと考えられる。文法史叙述の位置づけを行っていくために他分野の叙述方法も視野に入れる。

以上の点を前提にして、係り結びの衰退についての分析と言語史叙述の実践をおこなう。係り結びの衰退の要因を活用形の機能の変遷との関係で叙述することを試みる。係り結びの衰退は連体形の機能変遷と無縁ではないと考えられることから、さらに周辺の準体句等を含めた分析を進めつつ、この変化について、上述の叙述理論・方法のなかに位置づけていく。

#### (3) 日本語史叙述の方法の周辺諸問題の検討

日本語史の叙述方法の位置

言語史研究における日本語史叙述の位置を検討するにあたっては、印欧語史の方法と

対比しつつ、日本語に特徴的な漢字・漢語の史的研究の方法を視座に、日本語史の叙述方法の位置を明らかにする。

日本語史叙述に関わる基本概念の再検討

日本語史叙述をいかにおこなうかという点で、「役割語」概念は大きな問題を含んでいる。この「役割語」という概念を、「位相語」という類似する概念と対比しながら、その内実を検討する。それを通じて、日本語史叙述をいかにおこなうかの指針を得る。

### 4. 研究成果

#### (1) 歴史叙述の方法の基礎的検討

これまで、言語の「歴史」としての日本語の「歴史」は、一往描かれ、年表的事実はかなり明らかになっているといえてよい。ただ、それが日本語という言語の歴史叙述なのかと問われると、心もとない。そこで、言語の歴史はいかに叙述されるのかという点につき、叙述の構造という点から考える。

この歴史叙述の構造ということを取りあげるべきなのは、「物語り」という概念である。これは端的にいえば、時間的に隔たった2つ以上の出来事を時間的に組織化・統合化する行為である。そして、歴史が物語りであるというのは、歴史叙述は narrative として語られるもの、あるいは、物語り行為という言語行為によって紡ぎ出されるものだという考え方で、歴史は物語ることによってしか描き出せない、という議論である。

この見方によると、歴史 = 物語りは次のような構造をもつ。すなわち、先行する時点 A、後続する時点 B とそれらをつなげる説明項という構造をもつ。言い換えれば、このような何らかの形で関連づけられた3項構造が歴史叙述の構造といえることができる。

そして、A と B を結びつけるという歴史叙述における物語り的な組織化・統合化のあり方を言語史の場合において考えると、少なくとも次のような、組織化・統合化のあり方あり得る。

(a) 出来事の歴史的意味づけ、

(b) 因果関係、

(c) 言語変化の機構・型。

なお、言語史叙述においても、通常の歴史にみられるような歴史叙述の不断の更新は常に求められているものといえる。

#### (2) 日本語史における具体的実践 = 係り結びとその衰退

係り結びの機能

日本語史叙述の具体的実践として、係り結びとその衰退について検討した。それにあたっては、まずは、係り結びの機能を精緻に明らかにしておく必要がある。

そこで、古代日本語のきわめて重要な文法的特徴である係り結びにつき、平安時代語の

係助詞「ぞ」による係り結びにしぼって、「ぞ」による係り結び文とはどのような文なのか、係助詞「ぞ」のはたらきはどのようなものであるのか、また、文末が連体形で終止することにはどのような意味があるのか、という点について検討を加えた。

その結果、「ぞ」による係り結び文とは「(主題 A) + B + ズ + C = 連体形準体句」という構造をもつ拡大名詞文であり、「A とされるものは何かといえ、ほかならぬ B あるいは B + C である」という意味構造をもつ特立構文であるということ、また、「ぞ」のはたらきは、その上接部分、あるいは、それを含む節が特立部分であること表示するものであること、さらに、文末が連体形で終止することの意味としては、準体句述語により拡大名詞文を形成し、指定文の意味構造をなすことで特立するものであるということを示した。

係り結びの衰退という日本語史叙述

以上の点をふまえると、係り結びの消滅は、平安時代中期以降に進む連体形の機能弱化によるものと考えられる。当該期には、格助詞の接続助詞化にともなう連体形の終止用法化が起こっており、また、その後中世期に盛んになる連体形終止の増加・一般化も連体形の終止用法化といえる。いずれも連体形の機能(とくに準体機能)の弱化であるといえる。係り結びにおける連体形によって拡大名詞文を形成するというのも連体形の準体機能によるものであるのだが、連体形が機能弱化を起こすことによって、係り結びも機能を保てなくなるといえる。つまり、いずれの現象も連体形の機能弱化によるもので、それが上述の諸現象の原因になっていると考えられるのである。

そして、この点を上述の言語史叙述の構造という点からみれば、この現象は、(b)因果関係によって組織化・統合化された言語史叙述というところに位置づけられるといえる。

### (3) 日本語史叙述の方法の周辺諸問題の検討

日本語史の方法の特徴(方法としての日本語史)

言語史研究の方法は、ヨーロッパにおいて展開してきた文献学・比較言語学の知見を基盤とするものであった。つまり、これは、いってみれば「方法としての印欧語史」ということになる。ただ、この視座、とくに比較言語学の方法はインド・ヨーロッパ語族というかぎられた言語群のなかで育まれてきたものであるから、それ以外の言語からの視座が言語史研究にとって有効なこともあると考えられる。そして、「それ以外の言語」の一つとして日本語があげられる。つまり、現在の日本語史研究がおこなっている歴史的な視座が言語史研究の方法・視座として寄与していくことではないかと思われる。

そこで、近年の日本語史研究の注目すべき研究・動向に触れながら、日本語史研究が言

語史研究に寄与する方法・視座という側面について考え、日本語史叙述が言語史叙述一般に寄与できる点を考えていく。「方法としての印欧語史」に対する「方法としての日本語史」ということである。

この点について、言語接触による言語変化という点では、漢文訓読の影響による日本語の変容の議論、文字の形の歴史という点では、日本語の漢字字体の標準・略字体の形成、文字の変化要因という点では、社会制度との関わりによる文字の盛衰という日本語史研究の方法が、言語史研究一般に寄与していくことのできる可能性を論じた。

ただ、いうまでもなく、ここで検討した内容が日本語の歴史であったために「方法としての日本語史」ということになったに過ぎず、当然のことながら、中国語史、漢字文化圏における言語史なども、それぞれ特徴的な視座をもちうると考えられ、今後、そのような視点から考える必要もあるだろう。

日本語史叙述に関わる基本概念「役割語」の検討

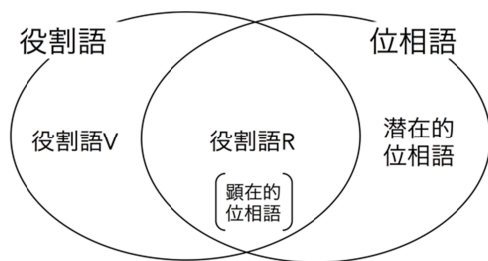
日本語研究において、日本語の社会的変異に着目する研究はさかんに進められてきた。近年、そこへ社会的変異にかかわる「役割語」という概念が提示された。これは、発話者の人物像(年齢・性別・階層・職業など)や発話場面と心理的に結びつけられたステレオタイプ的なスピーチスタイルであって、主にフィクション性のあるテキストにおいて、その制作者による人物像の表現として現れるものであるとされる。この概念は言語の社会的変異研究にとってきわめて重要な概念といえ、現在、「役割語」研究が積極的に進められている。と同時に、この「役割語」という概念は、日本語の歴史的研究を進めるにあたって、大きな問題もはらんでいる。それは、「役割語」という観点から考えると、これまで明らかにされてきた日本語史的「事実」に大幅な見直しが必要になる可能性があるということである。すなわち、従来の日本語史における位相研究がしばしば小説などフィクションをデータとして取り扱ってきたことを考えると、これまで位相差とされてきたものが、フィクションの作者による登場人物についての人物像の表現なのかということ、その話し方は実際の話し方の位相差の反映ではないということの意味する可能性があるということである。

そこで、その問題についてどのように考えるべきか、「役割語」の概念をあらためて検討しながら、考察を加えた。

その結果、この問題にかかわる概念としては、役割語・役割語 V・役割語 R・位相語・潜在的位相語という5つの概念を措定すべきであるという帰結を得た。

- (a) 役割語...ある特定の言葉づかいを聞くと特定の人物像を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定

- の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるときのその言葉づかい (= 金水敏の定義)。
- (b) 役割語 V...役割語(a)のうち、現実にはそのように使用されていないもの。
  - (c) 役割語 R...役割語(a)のうち、現実には使用されているもの。下記(d)位相語にも包含される。位相語という面からいえば、下記(e)に対する顕在的位相語である。
  - (d) 位相語...社会的な集団や階層、あるいは表現上の様式や場面それぞれにみられる特有語。(c)役割語 R と下記(e) 潜在的位相語とを包含する。
  - (e) 潜在的位相語...位相語のうち、その言葉づかいを聞いても特定の人物像を思い浮かべることができず、また、特定の人物像を提示されても、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができないもの。認知度の低い位相語。
- それを図示すれば、次のようになる。



このようにみると、役割語とは言語のステレオタイプを考えるための概念であって、直接には言語使用の現実・非現実を問題にするわけではない。非現実の言語使用のステレオタイプに絞って考える場合には、従来の役割語概念を分割して、非現実の役割語 V を設けることが必要であろう。また、役割語概念の導入によって、従来の日本語史研究で指摘されてきた位相語が非現実の言語現象として扱われることになるということは、にわかに肯定されることではないことが明らかになった。ただ、従来の日本語史研究が文献にあらわれた言語現象の性格を十分吟味しない傾向にあったということは否定すべくもないことであって、見出された「位相差」が何の反映なのかという反省が求められる状況になっているということは間違いないところである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

大木一夫、「言語史叙述の構造」、『日本語史叙述の方法』、査読無、2016年、1-25ページ

ジ

ŌKI, Kazuo, Japanese historical linguistics as a methodology, *How to Learn?: Nippon/Japan As Object, Nippon/Japan As Method*, 査読無し、2017年、265-284ページ

〔学会発表〕(計2件)

ŌKI, Kazuo, Japanese historical linguistics as a methodology, International symposium NIPPON/JAPAN AS OBJECT, NIPPON/JAPAN AS METHOD, 2015年10月30日、イタリア(フィレンツェ)

大木一夫、平安時代日本語「ぞ」係結試論、日本語文法学会第17回大会、2016年12月11日、神戸学院大学(兵庫県神戸市)

〔図書〕(計1件)

大木一夫・多門靖容編、ひつじ書房、『日本語史叙述の方法』、2016年、344ページ

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

大木 一夫 (OKI, Kazuo)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00250647